

西アジアの陶器と彩釉タイル

佐々木 達 夫

1 土器から施釉陶器・彩釉レンガへ

西アジアでは、紀元前七千年ころから農耕や牧畜が興り、次いで人々は土器の製作を始め、それを貯蔵容器として用いた。始めは、粗雑で簡単な土器であったが、紀元前五千年ころには、表面に文様を描いた彩文土器が生まれる。文様は、はじめは単純な幾何文であったが、しだいに直線と曲線を交えて複雑となり、さらに抽象的な動物文や植物文も描かれるようになった。そして、色彩も黒色の他に赤色や白色も使用されるようになる。

世界各地の民族が豊かな文様に飾られた彩文土器を用いている時、世界に先駆けてエジプトでガラス質の釉を掛けた陶器が誕生する。古くに発掘が行われたバダリ遺跡では、早くも紀元前四千年期に施釉された石製品があるともいわれている。エジプトでは前四千年紀末から青緑色のアルカリ釉をかけた小さな陶製品が生まれたらしい。たしかに、紀元前3200年と推定されている第一王朝のヘルメナの墓、エルセカーの墓などから青釉をかけた陶器が出土している。

こうした陶器はファイアンスと呼ばれる。石英の粉を固めて形を作り、その上を青釉で覆ったものである。紀元前2650年ころといわれる第三王朝ジェセル王の階段ピラミッドの地下廊下の石壁には、青釉をかけたファイアンス・タイルが嵌め込まれているが、これは青釉をかけたものが陶器だけでないという例の一つである。また、エジプトの多くの墓の中に並べられたウシャブチという青釉のかけられた人形などは紀元後に至るまで作られていたが、長期間にわたり類似した技法を用いていた。前二千年紀中ころになると、青緑釉下に黒褐色でナイルの蓮と鳥をあしらった皿などの彩画陶器も作られた。

第十八王朝はアマルナ時代と呼ばれ、文化的な発展の見られた時代であった。ファイアンス・タイルの彩釉にも青色の他に、白色、黄色、緑色、茶色などが加えられた。儀式用の室内の腰壁を飾ったものである。紀元前14世紀のことである。

こうした陶器やレンガ・タイルを施釉する技術は、しだいにエジプトからシリア、メソポタミアを経て東方の地域にも伝えられた。バビロニアでは紀元前17世紀より古いといわれる楔形文書によると、当時すでに基本的な釉薬があり、それに銅、鉛、硝石、石灰を混ぜて緑釉にして壺に施釉したという。前一千年紀にはイラン高原でも施釉陶器が作られるようになった。とくにアッシリア領内であったレザイエ湖の南のジヴィエで発見された大

量の彩釉陶器には、紀元前8-9世紀の優品が多いといわれている。それは青釉の地に黄釉で彩文した二彩、白を加えた三彩、あるいは青緑釉一色のもの、青・黄・白・黒で彩画するものなど、古代という時代背景のなかでは飛び抜けて多彩な陶器であった。

こうした施釉陶器の技術がメソポタミアでも建築材料にも応用されるようになる。それまで無地の石やレンガのままか、ときには顔料で彩色される程度だった壁面の一部が、彩釉レンガによって装飾されるようになったのである。土や石を見慣れた当時の人にとって、組み合わせによって大きな文様が描きだされた彩釉壁面を見ることは驚きであったに違いない。感嘆の声が聞こえてくるような気がする。彩釉は焼かれているから、簡単には剥げ落ちない。画期的な壁面装飾法の誕生であった。

アッシリアでは紀元前12世紀末ころの楔形文書に、ニネヴェの宮殿の櫓を彩釉レンガで飾ったという記述が残るといふ。しかし、発掘された彩釉レンガはまだ少ない。アッシリアの都市アッシュールでは、神殿正面に張りだして作られたベンチ状の部分に、彩釉レンガが使われていた。紀元前8世紀ころと推定されているが、軍隊が馬車に乗って山道を行く光景が表されている。人や馬、車などの輪郭線に黒色が用いられ、その中を白色、青色、黄色、緑色で塗っている。一つ一つの彩釉レンガは、大きな文様の一部分であった。大きな壁面に描かれた絵画の表面が、レンガの大きさに分けられて焼かれたともいえる。こうした彩釉レンガは、アッシリアの王が住んだニムルド、ホルサバードからも発見されている。しかも、彩釉レンガが用いられたのは、王宮ではなく、神殿の正面の一部と推定されている。

バビロニアでは浮き彫りレンガが紀元前1400年ころの神殿の外壁に使われている。ただし、彩釉はなく無釉である。ところが、彩釉と浮き彫りという二つの装飾技術がレンガのうでで融合し、巨大な壁となって現れた。紀元前6世紀、新バビロニアの都市バビロンにおいてである。愛と戦いの女神イシュタルの名前が与えられた高さ24mの市門と、その下を貫く通路（行列道路）の両側に彩釉レンガが貼りめぐらされ、神を象徴する動物、その上下やアーチの部分に花文様（ロゼッタ）が浮き彫り状に装飾されているのである。地色は青釉にし、有角龍ムシュフシュと牝牛の浮き彫りが交互に並び、その上にコントラストの強い白色や黄色の釉がかけられている。門から市外に向かう方向にはシュタール神を象徴するライオンの浮き彫りが並んでいる。

ネバカドネザル二世（前605-562）がこの門を初めて建てたときは、無釉の浮き彫りレンガを使っていた。最後の改築で彩釉浮き彫りレンガが用いられたというが、今は彩釉レンガはベルリンに運ばれ、博物館の中で復元されている。

アケメネス朝ペルシアに入ると、華やかな彩釉陶器は姿を消し、青釉陶器が主流を占めるようになる。彩釉レンガも同じ運命をたどったようで、バビロンがアケメネス朝に滅ばされた後は、彩釉レンガで飾られる建築も少なくなった。わずかに紀元前5世紀のころ、アケメネス朝の都の一つ、スーザのダレイオスの宮殿に見られるような、人物と動物の浮

き彫りをおおう彩釉レンガに技法が引き継がれたことを認めるに過ぎない。彩釉レンガは、古代帝国の栄光のもとで咲いた短命の花であったともいえるだろう。

アレクサンダーによってヘレニズム世界が登場し、それはローマとパルティアの帝国に分割された。紀元前二世紀、広くみられたアルカリ釉の他に、鉛釉がローマ帝国の東部地域（西アジア）で発明される。鉛釉では銅の発色は緑色となり、アルカリ釉による銅の青色とは異なる色彩となり、器の表面に釉薬が馴染みやすい特徴があった。素地から釉が剥がれ落ちることが少なくなったのである。東の中国でも同時代の漢時代に鉛釉による緑釉陶器が生まれるが、東西文化の技術交流を伝える例の一つであろう。このころ、オリエンはパルティアが支配し、青釉と白釉の施釉陶器が作られ、ローマ帝国の緑・褐色の鉛釉陶器の影響も受けた。こうした傾向は、パルティアからササン朝ペルシアに時代が移っても変わらず、青釉陶器を中心に、青・緑・褐色の釉と型押し・貼付けの技法が用いられている。

そして、彩釉レンガを使用した建物は、ヘレニズム以後は作られなくなってしまった。それは、ヘレニズム文化によって西アジアにスタッコ（漆喰を素材にした彫塑品）が広がり、ササン朝ペルシアでは建築を飾る代表的な位置をしめるようになったからであろう。壁面を装飾する浮き彫りの技術は、色彩を失ったけれども、イスラーム世界に到るまで絶えることなく伝えられているのである。スタッコの他には、色石を並べたモザイク装飾も用いられた。イスラーム世界で彩釉タイルが増加するのは、12世紀に入るまで待たねばならなかった。

2 イスラームの施釉陶器と彩釉タイルの発達

西アジア世界の施釉陶器は、ビザンチン時代に流行した型押文の陶器などをへて、イスラーム世界の美しい変化に富むさまざまな文様を描いた陶器へと発展する。イスラームは装飾文様が豊富な、色彩感覚に富む生活の時代ともいえる。8世紀にメソポタミアなどで作られた白色、青色などの釉で覆われた陶器は、9世紀に中国陶磁の器形を模倣しながら、独自にコバルト青色の文様で白釉陶器の器面を飾りはじめる。10世紀にはラスターと呼ばれる金属のようにきらめく文様の陶器が流行し、さらに11-12世紀には多彩釉で刻線文を描いた三彩陶器に類似した陶器も盛んに作られた。イランやシリア、エジプトなどでも、10～13世紀にかけて各地で特色のある施釉陶器が作られ、描かれるさまざまな種類の文様は、われわれの目を楽しませてくれる。こうした技術を背景にして12世紀後半からイランを中心に彩釉タイルが発達し始める。

2 A アッバス朝の陶器と彩釉タイル

7世紀後半から始まるウマイヤ朝では、まだササン朝のアルカリ釉の青緑釉陶器と、ビザンティンの鉛釉型押し緑・褐釉陶器を受け継いでいる。それは、アラビア世界にペルシ

アにとって代わる美術工芸の伝統がなかったからといわれている。こうした西アジアの陶器の様相が一変するのは、8世紀中頃に興ったアッバス朝の時代である。サラセン帝国の隆盛は貨幣経済の急激な発達をうながし、通貨材料の不足は金銀器製造を禁止させたともいう。それが金属器に代わる陶器の著しい発達のきっかけの一つとなったらしい。

アッバス朝は地中海からアラビア（ペルシア）湾へ重心が移動した時代でもある。さらに海陸両路による東方世界との貿易の隆盛は、都市を繁栄させ、それは施釉陶器の需要を支えた。こうして9世紀には、華麗で艶やかな色彩に富む、幻想的で魅惑的なイスラーム陶器が誕生したのである。

イスラーム陶器誕生の背景には、地域的な伝統や社会的な要因の他に、外的刺激としての中国陶磁の影響もみられる。白釉陶器碗は当時輸入されていた中国の白磁碗の模倣品と考えられている。しかし、すぐにイスラームの陶工は独自の工夫を行い、白濁釉の陶器には、青色に発色するコバルトで文様を描いた白釉藍彩陶器や、ラスター彩陶器を作りだしている。また、中国三彩との関係がつよい緑・黄褐色の多彩釉陶器には刻線の模様を付け、多彩釉刻線文陶器を創造している。さらに刻線文は中国の青白磁の刻線文の影響と推定されている。この陶器は12世紀以降、西アジア地域全体をおおう代表的な種類に発展している。

アッバス朝の陶器は鉛釉陶器が主で、数は少ないが金属器を模したような緑・褐釉の型押文陶器が残る。メソポタミアでは白釉陶器の発達が著しいが、藍釉や緑釉の他に、イスラーム世界に独特の銅・銀の還元作用で金属器のように表面の輝くラスター彩陶器も白釉を基本とした陶器である。これらの陶器の素地はまだ単味の陶土を用いている。黄色がかかる粉状の素地に焼きあがるものが多い。さらに東イランやトランスオクシアナなどの東方地域でも、多彩釉陶器や多彩釉刻線文陶器の他に、次のような陶器が作られている。それは、淡紅色の素地に緑・黄・紫黒色で文様を描き、黄味をおびた透明釉で上を覆う黄白釉彩文陶器。地色が濃黄色か淡黄色の黄地彩画陶器。白下地に紫黒・褐・緑色で文様を描き、クリーム色の透明釉をかけた白地黒彩・緑彩陶器。黒・紫褐釉や紅色下地に白・赤・黄褐土を盛り上げた色地彩文陶器。白下地に朱・黄・紫褐・紫黒・緑で文様を描き、黄味をおびた透明釉をかけた白地彩画陶器、などである。なお、東方地域の影響を受けたマザンデラン地方のサリーでも10・11世紀に白下地に紫褐・黄・朱・白で文様を描いた白地彩画陶器が生まれている。

このように、陶器の世界では華やかな発達があったにもかかわらず、彩釉タイルは12世紀まで一般的にならなかった。それは、ササン朝時代から流行していた彫塑スタッコが建物の壁を飾り続けたからであろう。しかし、例外は少しある。1911年から1913年に発掘され、世界で最初のイスラーム都市遺跡の学術調査となったイラクのサマラからは、わずかながら彩釉レンガ（タイル）が発見されている。それは、黄色釉を全面にかけたレンガ、緑色釉を全面にかけたレンガ、白釉の上に筆で黒色の草花文を描いたレンガ、そして白釉

の上に細かな赤色、黄色、茶色の模様が入り交じるラスターのレンガであった。華やかなラスターレンガには、月桂樹の葉でつくられた円の中に鳥が一羽描かれるという典型的なイスラームの文様が描かれている。いかに王宮が豪華に美しく飾られていたかをうかがえる例として知られる。しかも、1970年代から続くイラク人によるサマラの発掘では、彩釉レンガが王宮の床に敷かれていたこともわかった。これら彩釉レンガの形をみると、小形で長方形のものと、少し大きな方形のものがある。このレンガは9世紀のものだといわれているが、私は多くは少し後の時代のものでないかと疑っている。9世紀と推定できる白釉陶器の釉は溶けきらないものが多いのに、レンガの白釉はよく溶けているからである。技術的により高い温度で焼成が出来るようになった後の時代のものであろうと考える根拠である。彩釉レンガの出現は10世紀以降になるのかもしれない。しかし、王宮で使用されていたとすれば、アッバス朝の都が置かれた9世紀に限定しなければならないとも思う。いずれにしろ、彩釉レンガの出土量はきわめて少ないから、この頃は特別なものであったらしい。

2 B セルジュック朝の陶器と彩釉タイル

11世紀後半のセルジュック朝に入ると、製陶技術は飛躍的に進歩している。素地や釉、器形や装飾技法、それにデザインにも大きな変化が現れる。素地は耐火度と可塑性の強い白系統の複合土が用いられるようになる。それまでは素地から離れやすかったアルカリ釉も複合土素地にはよく馴染み、釉も以前の鉛釉のように流れることもなく、文様を浮き上がらせるための白下地も不要となった。器形も種類が多くなり、成形も巧みで端正な形となる。デザインはパルメットやアーカンサス、葡萄のような植物文が連続して唐草やアラベスクになる。動物文、植物文、幾何文も併用され、偶像禁止のイスラームの教義のために少なかった人物文も、宗教的な用途以外には盛んに用いられている。10色もの色彩を用いた色絵陶器には、繊細な筆致で叙事詩や叙情詩に歌われた物語絵が描かれている。その他にも、中国宋の青磁や白磁の輸入と関連する碧青釉や藍釉、白釉の陶器をはじめとして、七宝的な手法のラカビ陶器、影絵のような掻き落とし陶器、きらめくラスター彩陶器、白地に藍・青釉で文様を描いた白釉藍・青彩陶器も作られた。なお、マザンデラン地方のアモールでは白地彩画陶器や緑彩刻線文陶器、クルディスタンのガルス地方では掻き落とし文陶器（ガブリ手）、カスピ海西南のアグカンドでは鉛釉の彩画刻線文陶器が作られ、まだアッバス朝陶器の伝統が生き続けている。

このような陶器にみられる技術と文様が、彩釉タイルに用いられたのは12世紀後半から後のことである。平板的な型押し文を青釉でおおったタイルなどは、この時代のものであろう。

2 C イル汗国などの陶器と彩釉タイル

12世紀から13世紀にかけて、イランやシリア、エジプトなどではイスラーム陶器の素地に、粘土の他に白色珪石粉も使用されるようになる。こうした白色素地を使い、とくにイランでは13-14世紀に色彩と装飾が美しい優れた陶器が大量に作られた。それは、ペルシア陶器と呼ばれて今も愛好されている。そして、これと同じ時代に、同じ技法で同じ文様を描いた彩釉の装飾タイルが非常に発達した。13世紀後半になると、年代が推定できるラスター彩タイルがいくつかの廟で用いられている。14世紀の彩釉タイルの多くは、浮き彫り文様を青色でおおったもの、青色の上に金色で装飾をくわえたもの、きらめき手といわれるラスターなど、いずれも陶器と同じ技法である。これは陶器とタイルが、技術的・工芸的にいつも近い関係にあることを再び思い起こさせる。

13世紀中頃、イスラーム世界の都市は蒙古の侵入によって荒廃したが、イル汗国建設後は中国陶磁器の影響を受けて、再び陶器の製作が盛んになる。色絵陶器はミニ手から青藍地色絵陶器（ラジュバルディナ手）に変わり、生地は青藍釉が好まれ、色彩は紅朱・白・黒・金彩と減少する。青釉や白釉の彩画陶器はなお作り続けられ、黒彩上を青緑釉や碧青釉で覆う釉下彩画陶器がスルタナバードなどで生まれる。さらに白釉上を藍彩と黄緑色の細線で描く白釉彩画陶器、白土のデザイン上を黒・藍、黄緑で描き、淡青釉か青白釉をかける青釉白盛り上げ文陶器など、多彩な種類がみられる。文様は中国的なもの、ドラゴンやフィニクスなども登場し、この時代の特色となっている。

こうした陶器の技術と文様が、タイルにも応用され、中央アジアの古い都市に残る崩れかけたモスクの外壁をいまでも飾っている。ただ、イランの高原地域に限って彩釉タイルが見られるということも強調しなければならない。その他の地域では、彩釉タイルが使われることは例外的であったのである。

イスラーム世界の陶器は、その後、15世紀のティムール帝国時代はイル汗国の伝統を受け継ぎ、16世紀のサファヴィ朝に入ると中国陶磁器の技法を盛んに採り入れ、ペルシア染付が流行した。すると、すぐにまた、同じ技術がタイルにもみられるようになる。中国風の人物や草花を丁寧に描いた染付タイル、あるいはヨーロッパ風の絵付けなども16～18世紀にかけて流行している。

イランのイスファハンの華麗な装飾タイルで覆われた宮殿やモスクなどの建物は、彩釉タイルの美しさを最大限に引き出したものとして知られる。その多くは16世紀から後のタイルであること、また、人物画、風景画などの装飾タイルはそれまでの装飾法と大きく変化していることも注意を払うことが必要であろう。

2 D トルコの陶器と彩釉タイル

16-17世紀ころ、トルコやシリアでも美しい独特の文様と色彩の陶器とタイルが、同じような技術を用いて作られた。描かれた文様や装飾技法の類似性も大きい。同じ装飾技法と文様をもつ装飾タイルが、少し時代が遅れるけれども、イランと同じようにここでも発

達している。初期のセルジューク時代のタイルはコンヤやカイセリ、アハラットなどで作られた。ついで、15世紀のオスマン時代には、イズニクが主要な産地に発展する。この他にブルサでも作られている。イズニクでは釉下彩絵の陶器やタイルが作られ、さまざまな発色の青色や紫色で中国の染付に似た文様なども描かれている。16世紀から18世紀にかけて、オスマン時代の陶器とタイルは独特の雰囲気を生み出し、多くの建築を飾るようになった。イズニクやクタヒヤで作られたトマト赤などと呼ぶ盛り上がった赤色を釉下彩の上絵に用いたものが代表的なものである。多くの人がトルコの陶器やタイルと呼ぶのは、こうした種類をさしていることが多い。

タイルは建築の装飾材料の一つとして、宮殿やモスク、廟などの壁装飾に衰えることなく使われている。ミヒラブ（壁龕）も彩釉タイルで飾られることが多い。豪華な建物の室内に作られた噴水の回りは、大理石やモザイク、ときには彩釉レンガで飾られることがあった。また、王侯貴族の謁見の間は、彩釉タイルで飾られることもある。ただ、庶民の建物に美しい彩釉タイルをみることは難しい。やはり、彩釉タイルは高価な装飾品であり続け、しかも、西アジア世界のなかでも一部の地域でしか使用されなかったものなのだろう。

彩釉タイルは建築の各部分、すなわち室内壁や天井、ドーム、アーチなども飾った。その文様は、雪が融け一斉に咲き出すチューリップやナデシコの花文、ザクロの実、植物文などが多い。色彩感も豊かであり、白地に青、緑、トマト赤あるいは小豆色が浮き上がり、トルコの特色を生み出している。17世紀にトルコからオランダへ輸出されたチューリップがいかに高価なものであったか、オランダでいかに愛されたかは、チューリップがデルフト・タイルで愛された文様であったことからわかる。その原型はトルコにもあった。

3 装飾タイルと施釉陶器

3 A 装飾タイルの魅力

本来、レンガやタイルは組み合わせて建築に用いるものだった。一つ一つのレンガやタイルは、独立したやきものとして見られることはなく、大きな面として鑑賞されるものだった。建物の一部として、建物全体の美しさを引き立てていたレンガやタイルは、何百年か経って崩れ落ち、割れてかけらとなった。そこで初めてやきものとして、その個々の美しさを愛でられることになる。

タイルの文様は、さまざまな動物や草花など自然の中にあるものだけでなく、抽象的な文様もひじょうに多い。一つ一つのタイルの文様で全体の柄が決まるばかりでなく、つながり方でも複雑な図柄を生み出すことができる。小さな板の組み合わせが面を作ることを利用して、タイルの形や色を工夫すれば無限に近い文様を作ることが可能になる。個々のタイルの色や形からは想像できないほどの洗練されたデザインが発達したのは、そのためである。タイルに描かれた文様には、今は失われてしまった当時の生活を思わせるものもあ

り、破片になっても見飽きることがない。

3 B 装飾タイルと施釉陶器の類似性

こうした西アジア世界の装飾タイルは、同じ地域の施釉陶器と近い関係にある。やきものに使われる土の関係で、東アジアでは固く白い磁器が発達したのに対し、西アジアではやわらかい土の陶器しか作られなかった。製作技術や装飾方法、そして文様も、装飾タイルと陶器はきわめて類似している。とくに年代や産地については、考古学調査の成果により、陶器の歴史はタイルの歴史よりも明らかになっている部分が多い。タイルも建築の建造年から推定できる場合があるが、修復が多いので正確に年代を知ることは意外と難しいものである。それで、イスラームのタイルを知るには、今は施釉陶器とともに考えるのがよいようである。

建築材料として用いられた彩釉レンガや装飾タイルは、同じ時代に作られた施釉陶器ときわめて近い関係にあった。材料や焼成、釉薬、そして装飾技法や描いた文様など、基本的な作り方は同じである。しかし、陶器は室内で使う日常生活の容器であり、レンガやタイルは建築の表面を飾る建築材料であった。陶器は一個で完成した世界を作るのに対し、レンガやタイルは組み合わせの美、つまり集団で装飾することを求めて作られた。小さな、限られたスペースの陶器の装飾に対し、連続文の装飾法が、存分にその特性を発揮できたのが建築の壁面であるといえよう。単色釉のもの、絵を描いてあるもの、浮き彫りの文様が加えられているものと、さまざまなタイルを組み合わせで貼られる壁面は、今日、当時の職人達の高い技術とセンスの良さを見せてくれる。

3 C 実用的な装飾品と工芸品

イスラーム世界の陶器は、あざやかな色彩と華麗で多彩なデザインで知られる。とくに巧みな組み合わせと連続する文様は、世界でも稀なものといえるだろう。それは、王侯貴族や富裕な都市の人々の保護のもとに華やかな工芸品として発達したためであり、また、宗教的な用途の器には人物・動物模様が禁じられ、許された範囲内で最大の変化を求めたためである、といわれる。さらに、盛んな交易で運ばれた陶器は各地域で模倣され、広いイスラーム世界の中に類似性と統一性を生み出した、ともいわれる。こうしたことが果して歴史的な事実かどうかの吟味はさておき、イスラーム陶器が西アジアで花開いた千変万化の色彩と文様に飾られた美術工芸品であったことは、誰もが認めることだろう。

3 D イスラームタイルの特徴

焼きかた

陶器もタイルも、材料には粘土を用いている。タイルは、材料の粘土の質が粗雑でもよ

く、多くは型で形を作り焼いている。陶器もタイルも東アジアよりも低い温度で焼くために軟質であり、とくにタイルは床材として適しているとはいえない。低温で焼かれた釉薬ももろいため、用途に制約ができる。彩釉レンガやタイルを焼成した窯跡の発掘はまだ行われていないため、具体的な製造過程については、不明な点が多い。釉薬をかけたやきものは野焼きで作れないから、窯を使ったことは確かである。無釉のレンガを焼いた窯跡は各地で発見されており、今も盛んに煙を上げている。エジプトでもメソポタミアでも窯の構造は、基本的には大きく変わることなしに数千年にわたって続いてきた。陶器や無釉レンガは単室の窯で焼かれたから、彩釉レンガやタイルも同じような構造の窯で焼成されたのであろう。

形 態

レンガやタイルは一個で使用されたものではない。組み合わせで、大きな面を飾るためのものである。円形のタイルだけの組み合わせでは、どうしても隙間ができてしまう。方形、長方形、三角形、十字形、六角形（亀甲形）、八角形（星形）などの直線で囲まれた形のもののほうが、隙間なく全面を埋めるのに適した形になる。連続して面を埋めやすい方形や長方形が基本となり、六角形や八角形を使うばあいには間を埋める三角形なども組み合わせる。なかでも星形と十字形の組み合わせは美しく、典型的な形態といえる。数は少なくなるが、台形や菱形、楕円形、あるいは名前をつけるのが難しい形もたまにみられる。一つ一つのタイルの図柄とは別に、組み合わせ方で生まれるデザインそのものの装飾的な効果も大きい。

厚 さ

壁本体の一部としてのレンガから、内外壁の表面部分に置かれる彩釉レンガ、そして、さらに室内外の壁の表面に貼る薄い装飾タイルへ、という変化がみられる。イスラーム時代には、レンガ壁の表面に貼り付ける薄いものが多くなる。British 博物館に所蔵されるサマラから発見された彩釉タイルの厚さは、ラスター彩四角形3.6cm、黄褐釉星形 2.4cm、黄褐釉四角形三点が 2.4cm, 2.5cm, 2.6cm、黄色と黄褐釉の四角形が1.0cm であった。この時点から彩釉タイルと呼ぶことができるだろう。

素 地 と 釉

タイル素地の分析はまだ少ない。イランのイスファハンの装飾タイルがイスファハン大学によって化学分析されている。16世紀に建てられたイスファハンのジャーメ・モスクやイマーム・モスク等から分析用の装飾タイルが採取されている。青釉は K 13%, Ca 12%, Cu 5%, Fe 4%などと報告されているが、それほど精度の高い分析ではない。

装飾の方法

表面に、浮き彫りや彫塑を施したものもある。しかし、多くは表面が平らで、彩釉・施釉だけによる装飾のものである。はじめは単色釉であったが、やがて文様を描くようになり、同じ色釉を全面に塗ることと、多色の釉を用いてさまざまな文様を描くという二つの方法が用いられるようになった。陶器と同じく装飾技法の種類が豊富になり、タイルが華やかさを増したといえよう。陶器とレンガやタイルは、時代や地域が同じであれば、よく似た手法を使う場合が多い。

色彩

青色はいつの時代にも多いが、イスラームになると白を基調にして多彩色の文様で飾ることが好まれるようになる。13-14 世紀の青の流行は、中国の竜泉窯の青磁の流行と深い関係があったと推定できる。タイルの色には時代的・地域的な変化と好みが見られ、それは陶器の釉薬や文様の変化と一致している。陶器には見られない組み合わせによる配色の妙は、タイルに独特のものである。

文様の種類

施釉された陶器やレンガ、タイルには、単色釉で無文のものがもっとも多いように思える。時代によって、それは青色であったり、白色や黄色であったりする。しかし、白色を地色として、そのうえに彩釉を用いて文様を描くことがしだいに一般的になると、文様の種類や描き方によって、地域の特色、時代の特色がより多く生み出された。鳥文、植物文、人物文、幾何文、草花文、組紐文、アラベスク、コーランの一節を書いた文字文など、イスラーム世界のタイルの文様として、すぐに多くの種類の文様を数え上げることができる。だが、一つ一つをとれば、その多くは陶器の文様でもあった。

連続文様が組み合わせタイルの全面を埋めるのを見ると、いかにもイスラーム的と感じる。中心の絵画文を枠となる連続文が囲むものもあるが、この組み合わせを対称的に配した大きな図柄もよく見られる。こうした大きな文様は、同じ時代の絨毯の文様構成と共通していることもわかる。

使われた場所と使われ方

古代社会では、彩釉レンガは神殿の正面壁や宮殿などの一部に用いられた。神を祭る宗教的な建築を飾ることが多かったのが特徴といえる。支配者といえども宮殿の室内壁の一部を彩釉レンガで飾るのは難しかったに違いない。無文で色のないレンガ、または泥の壁が一般的であった時代に、彩釉レンガの装飾的な効果がいかに大きかったかは想像を絶するものを感じる。そして、古代帝国の消滅とともに彩釉レンガを使う習慣も途絶えてしまった。

千年以上の間隔をおいて、イスラーム時代に再び彩釉レンガ・タイルが使用されるようになった。この時代においても、モスクや廟など宗教儀礼の場所や王侯貴族の宮殿や居館などにみられることが多く、まだ庶民の生活にはほど遠いものであった。だが、しだいにタイルは富豪層の生活の中にとり入れられるようになる。鮮やかに装飾された耐久性のあるタイルは都市の大建築の室内壁を飾りはじめた。中庭の装飾にも用いられ、噴水の床面にも貼られる。噴水とは、アラブ世界の暑い夏をしのぐために、中庭や時には部屋の中程に作られた水溜のことである。水の少ない乾燥地域だから、水は勢いよく吹き上げるのではなく、静かに滴り落ちる程度のものがほとんどであったらしい。足を浸して涼しさをとったのである。冬の日本のコタツはこの反対と思えばいい。19世紀の豪華な建物には、ヨーロッパの影響をうけたためか、装飾タイルで飾られた暖炉もみられる。

3 E 風土と文化が生んだ色彩と装飾

西アジアの地域では、色調の強い鮮やかな釉薬をかけた陶器が作られた。東アジアや東南アジアよりも早く、そしてより色彩感に富む施釉陶器が広範囲に見られるのは、西アジア世界の大きな特徴であろう。

装飾性に富み、鮮やかな色彩の陶器をみると、誰でもそれは西アジアの風土や自然によく溶け合っていると感じるだろう。だが、そうした施釉陶器を、黄色の土と青い空の下で生活がごく自然に生み出したものだとは簡単にいうのには疑問がある。独特の色合いや装飾が使われた背景には、地質的、技術的、宗教的な制約などが混在していたことを忘れてはならない。

東アジア世界では、地質的な条件から、高温で陶磁器を焼くのが可能な粘土を手に入れやすく、そのために高火度で溶ける釉薬が利用できた。そのため、白磁や青磁など、単色釉の陶磁器を作る条件に恵まれていた。ところが、西の世界は違っていた。

西アジアでは、高い温度で焼くことができる粘土が少なかった。したがって釉薬も、低い温度で溶ける種類を利用しなければならなかった。低い温度で溶ける釉薬には、含まれる金属によって、青や黄、緑などの鮮やかな色を容易に出すことのできるものが多い。また、高い温度で陶器を焼くには脂の多い松などの燃料が必要となる。乾燥した土地が広がる西アジアでは、燃料は火力の弱い草木が主とならざるを得ない。つまり、陶器を低い温度でしか焼くことのできない地域であった。

低い温度で融ける釉では、原色に近い鮮やかな色が、融けている金属の種類によって発色する。鮮やかで多彩な色は、粘土の質の悪さや燃料の少ないことに原因があったのである。

イスラームという宗教が偶像崇拜を禁じたことも、イスラーム時代の装飾文様の展開に影響を与えたといわれる。聖と俗があり、実際の生活の面では多くの人物や動物が陶器にも描かれている。しかし、コーランを書いた本の表装や縁模様の鮮やかさは、当時の美術

工芸に携わる人々が力をいれていた分野を示してもいる。文献が伝えることを鵜呑みすることもできないが、宗教の影響力を無視することも正しくない。

風土は、多くの場合、そこに住む人々に多くの制約と影響をあたえた。生活に密着した容器である陶器の場合には、それが明らかに見られる。西アジアに独特と思われる形の陶器やレンガ、タイル、そして、その表面を飾る文様も、やはり風土や技術、生活や文化の織りなす産物の一つであった。

3 F イスラーム風とは

コーランは「信者の者よ、酒と賭矢と偶像神と占矢とは、いずれも厭うべきこと、シャイターンの業じゃ、心して避けよ」と述べる。ハーディス（聖伝）にも生きものの造形化を禁止するよう説かれている。したがって、公には具体的な動物の表現はできないことになっていた。そのため、主要な文様として、植物や文字、組紐などが連続文として多用されている。だが、動物や鳥、人物が陶器の文様にしばしば描かれることも事実である。広いイスラーム世界には、多くの民族が住んでいたし、宗教もイスラームばかりではなかった。また、たとえイスラームであっても地域ごとに伝統も違っていた。実際の生活まで厳しく規制されていたと考えるのは行きすぎかもしれない。工芸品にあらわれた装飾文様の意味を画一的にとらえることは無理であろう。

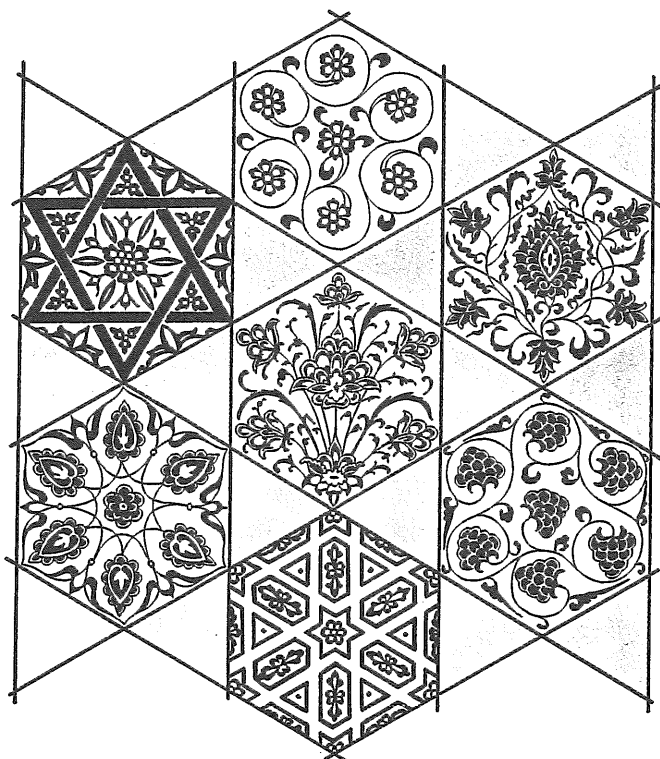
イスラーム風とわれわれが考えている装飾や建築は、ペルシア文化の装飾や、キリスト教の建築などを利用して生まれたものであった。イスラーム発祥の地であったアラビア半島には周辺地域よりも優れた文化がなかったためである。しかし、イスラームの広がりとともに、東アジアや東南アジア、ヨーロッパとは違う装飾が各地で完成していくようになった。その背景には、やはりイスラームという宗教の存在が大きい。また、工人の移動も活発であった。大きな都市を新たに建設するとき、他の都市に住む工人を大量に連れてくることは、しばしば見られたことである。イスラーム風という雰囲気はこうして作られたのだろう。

イスラームから他の世界へあたえた影響も大きい。スペインはイスラームの影響を今に残すヨーロッパとして知られる。14世紀に大部分が建設されたナスル朝のアルハンブラ宮殿やその周辺の建物には、イスラーム風といってよい装飾が残る。なかでも中庭にある噴水とその周辺の建物壁を飾る装飾タイルは、イスラーム世界の頂点に立つともいえる。こうした装飾タイルの技術はヨーロッパ世界へと影響を与え、ヨーロッパ近世の陶器やタイルの発展をうながした基本的な技術となった。しかし、そこには幾何文、草花文などから、生活を直接に描くような動物や風景などへという題材の変化も多く見られる。やはり、イスラーム風とは、宗教と切り離せないのだと思う。

4 タイルからみる西と東

日本ではレンガの発達が遅れた。木造建築にレンガは合わないからだろう。古くからレンガを使用していた中国や朝鮮でも、彩釉レンガとなると数が少なくなる。東南アジアでも、石造りの寺院などで彩釉レンガが使用されているが、一般的な使用は中世以降のことであり、数も多いとはいえない。例えば、最近では日本でもみることができるようになったミャンマーの緑色と白色の釉薬をかけたレンガがある。これは寺院の壁の一部に使用されていたらしい。こうしたミャンマーの彩釉レンガの起源は、12～13世紀にまでさかのぼる可能性も指摘されているが、やはり珍しいものである。やや広がりを持ち始めるのは15世紀よりも後のことである。

ところが、石造りや土造りの建築が主流となった西アジアでは、じつに美しい彩釉レンガやタイルで飾られた建築がいまでも各地に残っている。建物じたいが石や土であることが、彩釉レンガの普及の程度と深く関係しているに違いない。しかも西アジアでは、鮮やかな発色を可能にした施釉技法の歴史も古く、地域や時代の違いによって色彩や文様にくつもの変化が見られるのも楽しみである。といっても、西アジアでさえも、庶民の家に彩釉レンガや装飾タイルが使用されたことはなかった。釉薬をかけたレンガやタイルは、富裕な人々の家屋、あるいは宗教的な建築で用いられたものであった。



染付タイル、トルコ・エディルネのモスク、15世紀 (Islamic Designs, 1988より)